令和5年8月1日発行/ 春燈/第78巻第8号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

春燈

2023 August

8月号

久保田万太郎の句

ほそみとはかるみとは蝶生まれけり

『春燈抄』昭和二十二年

万太郎の俳句に対する考えが示唆されていると思える句。芭蕉の俳諧理念である「ほそみ」と「かるみ」がさらりと詠み込まれており、印象的に蝶が生まれることが、句が生まれることに重なります。万太郎の美的センスが凝縮されており、蝶のように軽やかに、しなやかに、そして平明な句を泳むことを教示してくれているように思えます。

武田巨子

PDF= 俳誌の salon

久保田万太郎の句

たけのこ煮、そらまめうでて、さてそこで

「流寓抄以後」

万太郎の句には、しばしば読点がはいる。この句も読点で間を置き、食材をうきうきと用意される姿が浮かんでくる。俳句の中に読点を置くのは、散文を書く万太郎だからこそ出来るのだろう。

「さてそこで」と、次はお酒を用意なさるのであろう。燗をつけるか冷にするかまでも想像できる。万太郎だからこその「さてそこで」が利いている。

辻　泰子

PDF= 俳誌の salon

名誉主宰　安立公彦

剪定の一樹をつつむ夕日かな

老いてなほ勤めは至上走り梅雨

隣家より音読のこゑ子供の日

兵たりし師を思ふ日や天道虫

草笛にこもるひと日や梅雨近し

主宰　鈴木直充

手提げより麺麭のはみ出す薄暑かな

定位置に万年筆や明易し

納戸より闇のにほひや麦の秋

白靴の誰か待ちゐる日照雨かな

葛餅や厄年とうに遣り過ごし

PDF= 俳誌の salon

当月集

鈴木直充選

○　古谷昌女

白杖のたしかな歩み風光る
仁和寺の法筵に散る沙羅の花
籐椅子や過去の重みに凹みたる
草餅や濱田庄司の益子焼
削りゐる鉛筆匂ふ春の昼

○　有川秀一

彼方此方に軋む音あり梅雨に入る
独り居や母の手をまね冷素麺
亡き母の「おかへり」聴こゆ蝿覆
賀茂祭り印欧語の人陣を取り
ほくそ笑む地図に噴井の印つけ

○　立竹人

ふるさとに父母共に亡し鳥曇
父の忌がすぎ母の忌や新茶汲む
亡き母とのむ黎明の新茶かな
短夜のせせらぎ音をただしけり
たいくつなひと日過ぎゆく松の芯

○　秋山蔦

飛石の少し濡色銀盃草
河骨に金色の風とどまりぬ
母の日や研けばシンク光満つ
著莪咲くや入り日の早き西の村
笹百合のくるほしくなる匂ひかな

○　中島美冬

ガレージも今や菜園初なすび
角平は角の蕎麦屋や富貴草
かはゆいが好きといふ子の武者人形
かたつむり殻を残して失せにけり
新緑の山道縫ひて郵便車

PDF= 俳誌の salon

春燈の句

鈴木直充選

おしやべりにやうやく疲れ蕨餅　京都　村上　國枝
口開けてポストうららか五連休
囀や遊べあそべと誘へる
雨降るも急がぬ旅や蝸牛
独り居に耐へて黙して雪の下　東京　竹林　月夜
貞淑な妻恐ろしや七変化
友来ぬ日空白埋むる風炉点前
白薔薇の咲き満ちて誰待ちゐるや
東山の借景けぶり梅雨深む　京都　小西みさを
献血を呼び掛くる街聖五月
偕老や緑さす道試歩の杖
血脈のたしかな熱気袋角
誹諧は老後も楽し春らんまん
行く春やどんつきといふ曲り角（我が城下町）　滋賀　馬場　節子

町なかピアノ次々奏で五月来る
捩花や心真つ直ぐ育つ孫
ひと仕事終へて紫陽花切りにけり
炊立ての軽く一膳豆御飯
かにかくに終はる一日冷し酒
あぢさゐのひと雨ごとに老いにけり
母の日や妣の仕草を真似てみる　宮崎　齊藤　豊
夕間暮れ十薬の白祈るごと
祇王寺のひらりくるりと竹落葉
青葉風五重の塔の五彩かな　栃木　福島　和子
かたつむり衿持の角をもたげけり
ででむしの程の歩みとなる身かな
若葉風大谷投手のスライダー
母の日や諭されしかの幼き日…　神奈川　奥田　眞二

PDF= 俳誌の salon